

太郎坊宮の歴史



二、太郎坊宮の歴史

上代・太郎坊宮ができるまで、

靈験

神々のご利益。神々のしるし。

太郎坊宮の成り立ちについて、言い伝えや文献を辿っても「古すぎて分からない」というのが実情である。翻せば、それほど昔から人々は太郎坊宮を仰ぎ、尊んできたという証でもある。

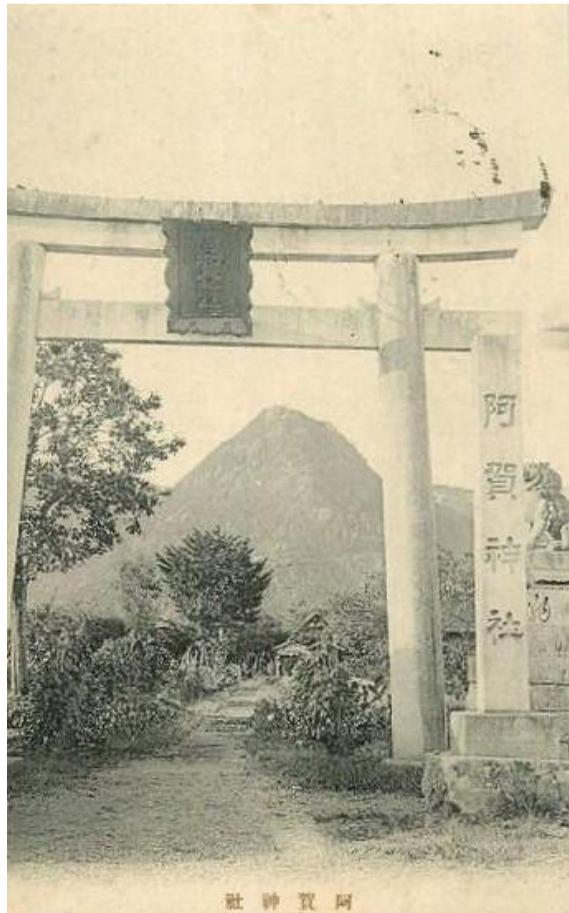
祭祀

神として崇め、供物などを奉げて祀ること。

最も古い言い伝えによれば、聖徳太子がこの地に足を運ばれた折、靈験れいけんがあつて祭祀をされたことに端を発するといふ。しかし、神社の成り立ちを更に辿ると、聖徳太子が訪れる遙か昔より、人々は太郎坊宮の鎮座ちんざする赤神山を尊び、拜んでいた様子が浮かび上がってくる。

第一鳥居

明治二十七年（一八九四）に建立された鳥居。太郎坊宮の参道への入り口に立つ最初の鳥居である。大阪の実業家、土井樞三氏の奉納。鳥居の奥には赤神山が写っている。鳥居脇には「阿賀神社」と書かれた社標があるが、現在は「太郎坊宮」の社標に改められている。



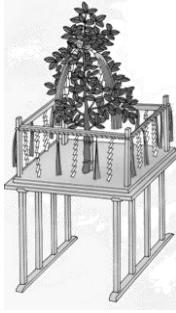
その理由として、日本人の自然観に基づく非常に古い自然崇拝すうはいという信仰形態が挙げられる。自然崇拝とは、自然物や自然現象を崇拝対象とする原始的な宗教形態をいう。太陽や月、山、川、巨岩石といった自然物そのものを神霊

磐座

神社の原型ともいえる祭の場所。神の坐す場所として特別視される岩を磐座とし、神霊を招いて祭事を行った。下の写真は太郎坊宮の夫婦石。古くから注連繩しめなわを張り、神聖視した。

神籬

神霊を招き、祭祀の対象としたもの。常緑の樹木を用いる例が多い。



として崇拝する場合と、そうした自然物の背後に神霊を見出して崇拝する場合がある。信仰の実例としては、山や森などに磐座いわくらと呼ばれる特別な岩や神籬ひもろわと呼ばれる神聖な樹を見立て、神霊を迎えて祭事を行うというものである。

現在のように、本殿を含む社殿に神霊を据えて祭事を行うのは仏教伝来以降のことであり、原初の姿は祭事が終ると、神々にお帰り頂くといいものであった。こうした祭祀の対象となる山は形の整った山や、良水



神体山信仰

山そのものを神あるいは神を象徴する神聖なものとして信仰する思想。

阿賀神社

東近江市野口町に鎮座する神社。天忍穗耳命を御祭神とする。赤神山を拝んだ山麓の磐座の地に立てられた神社といわれるが不詳。

奥おくつ磐座いわくら・辺へつ磐座いわくら

山上や山奥等にある磐座を奥つ磐座といい、山麓や山境等にある磐座を辺つ磐座という。対関係にあることが多い。

を出す山、火山などが多く、その他の自然現象とも結びついて神のいる所、神の降臨する所として神聖視した。これしんたいざんしんこうを神体山信仰ともいう。明確な古代祭祀の遺構こそ確認できないが、太郎坊宮の境内には磐座に類するものとして「夫婦岩」が存在するほか、山中には巨岩石が点在する。また、太郎坊宮が建つ赤神山と同じ山系には磐座と想定される大岩があり、周辺からは祭事に用いられた土器の破片や、たまといし玉砥石などが大量に出土している。

なお、赤神山の麓から少し離れた場所に、同じく阿賀神社あがじんじやの名を有する神社が建つ。この阿賀神社の境内には、かつて祭事を行った跡と考えられる巨岩が残されている。神体山信仰の一種の定型として、山上の磐座の神を拝礼するときに山麓にも磐座を設けて祭事を行うというものがある。

四天王寺

大阪市にある和宗の総本山。聖徳太子の建立といわれる大寺院で、大いに栄えた。

瓦屋寺

東近江市にある寺院。太郎坊宮と同じ箕作山系の山中にあり、聖徳太子が四天王寺建立に際して瓦を焼成させた跡に建つ。

聖域

神聖な区域。

そのため、この阿賀神社の巨岩石群が山麓の磐座に相当し、ここから遙かに赤神山の神を拝礼したという説もある。今となつては祭事上の関係性は皆無で、確証を得ることはできない。しかし、磐座信仰の霊地とまで讃えられた太郎坊宮の成り立ちを考えると、神聖視された赤神山の付近で祭りが行われ、それが後世、神社に発展したものと考えられる。

さて、聖徳太子にまつわる伝承を踏まえて太郎坊宮の発展を辿つてみたい。聖徳太子が当地を訪れたのは、推古天皇すいこてんのうの御代といい、西暦に換算すれば大体六〇〇年頃の事跡である。聖徳太子は摂津国してんのうじに四天王寺を建立する際、十万枚に及ぶ瓦を赤神山が属す箕作山系みつくりさんけいで焼成したといわれ、その際に尊い靈験を感じ、赤神山で神を祭られた。その聖域

聖徳太子（五七四〜六二二）

用明天皇の皇子。うまやどのおうじ厩戸皇子とい

う。深く仏教に帰依し、推古天皇の
摂政として仏教を基調とした政治
を行った。聖徳太子の手による冠位
十二階や十七条憲法は特に有名（図
版は『前賢故実』より）。

仏教公伝

欽明天皇の御代（五三八頃）、百
濟から朝廷に伝えられた。公的では
ない伝来はもっと早く、渡来人が伝
えた。当初は外国の神として排除さ
れたが、次第に広まった。思想、建
築、美術など、我が国に及ぼした影
響は大きい。

に建てられたのが太郎坊宮であるという。太郎坊宮の付近
には聖徳太子開基の伝承を持つ寺院が数多くあるほか、八
日市場も聖徳太子が開いたといわれている。

聖徳太子と同時

代頃の大きな出来
事と言え、大陸か
ら外来思想である
仏教が伝えられた
ことが挙げられる。



こうでん きんめいてんのう
我が国への仏教公伝は欽明天皇の御代とされているが、仏
教伝来は宗教思想に限らず、多くの文物をもたらした。神
社建築の発展に欠かせない要素とされる寺院建築も、仏教
とともに伝えられた技術である。史書を辿ると、この太郎

神崎郡

現在の滋賀県で、琵琶湖の東岸地域。蒲生郡と隣接する。

蒲生郡

現在の滋賀県。蒲生野と称された朝廷の狩猟地がある。太郎坊宮がある小脇郷も、蒲生郡に属す。

渡来人の増加

七世紀頃の朝鮮半島では、百済や高句麗こうくりという国が滅亡。難を逃れた人々が日本に渡来し、定住するようになった。渡来人が伝えた思想や技術は地域の発展に寄与した。

坊宮近辺にも比較的早い段階でこうした外来思想と技術が伝来した様子が伺える。『日本書紀』に天智天皇四年（六六五）、百済の渡来人四百名を近江国神崎郡かんざきぐんに置くとの記述が見られる。天智天皇八年（六六九）にも、蒲生郡くだけらに百済人七百名余りを置いたとの記述がなされている。

これら渡来人に関する伝承は太郎坊宮の周辺地域にも残されており、人々から「狛こまの長者ちやうじやの伝承」と称され、語り継がれている。明治時代に太郎坊宮が合祀した金柱宮についても「新羅が建てたりし持仏堂の金の柱」や「金柱古麻長者持仏也」との記録が残る。また、金柱宮近くの山腹には二基の古墳が存在し、六世紀中頃のものとして推定される土器類も発見されている。近郊の布引丘陵ぬのびきでは、渡来系の高度な技術を駆使したと推定される窯場跡かまばがあるほか、

高麗寺

駒寺とも。東近江市神田町の寺。かつてはかなり広域まで信仰された規模の大きい寺院であったといふ。

こまでら

高麗寺という名の寺院跡もあり、随所に渡来人との関わりを思わせる名称がある。

太郎坊宮の成り立ちから草創期の発展を考えると、原始的な自然信仰、聖徳太子や渡来人の関与といった事柄が浮かび上がるのである。

中世・太郎坊宮の発展

社殿僧坊

社殿は神社に付属する建物のこと。僧坊は僧侶が起居する建物のこと。かつて太郎坊宮周辺には山麓の寺院も含め、建物が立ち並んだといわれる。

「太郎坊宮には、五〇余りの社殿僧坊しゃでんそうぼうが軒を連ねた」と

いう言い伝えがある。古くから太郎坊宮に対する信仰が盛んであったことを伝えるものだが、これら建築物の建立を発願したのは最澄とされる。古伝によると、修行のために各地を巡拝していた最澄がこの地に詣で、その大いなる御

成願寺

赤神山の山麓に建つ天台宗の寺

せきしんざん

院。山号は赤神山。太郎坊宮と深い繋がりを持ち、かつては成願寺の僧侶が太郎坊宮を管理していた。下の写真（成願寺提供）は本尊の木像薬師如来座像で、墨指定文化財。他に鎌倉時代の石灯籠がある。佐々木氏から領地の寄進を受けるなどして栄えた。

今堀日吉神社文書

滋賀県東近江市の今堀日吉神社に伝来する古文書群。中世の商業や村落制度について詳細な記録が残されている。重要文化財。

神徳に感銘を受け、社殿を建立して太郎坊大神に献じたという。

長い歴史の中で太郎坊宮と密接な繋がりを有した天台宗

成願寺は、延暦十八年

（七九九）に最澄によつ

て建立されたという由

緒を有しており、本尊は

平安時代に制作された

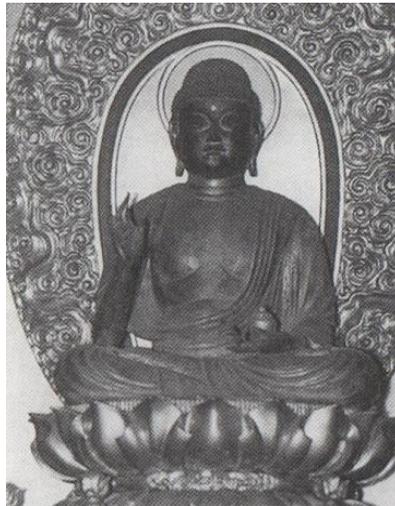
薬師如来像である。

最澄が建立した五十

余りの社殿僧坊の全容は今となつては明らかではないが、

『今堀日吉神社文書』には「竹中坊」「上坊」「松本坊」「石

垣坊」「大泉坊」といった僧坊の名が記されている。また、



太郎坊宮参道入口

成願寺を経て太郎坊宮に至る参道の入口。

付近にはかつて五〇余りの建物が立ち並んで栄えたが、戦国時代に兵火にかかって衰えたという。残された地名から類推すると、かなり規模の大きい社寺一体の聖地であったと思われる。

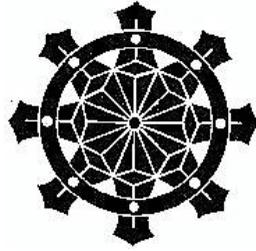
成願寺は江戸時代に再興され、諸願成就の祈願所として再び信仰を集めた。現在はわずかに石垣坊と行万坊を残すのみである。

近辺の田畑名には「坊領」「食堂」「門前」「五（御）念坊」といったような、社殿僧坊を連想させる語句が残されている。いずれも太郎坊宮が神仏習合思想の最中にあつた証であるとともに、大いに栄えていた様子が伺える。



御神紋

神社を象徴する紋。太郎坊宮の御神紋は、外輪に八鋒を備えた八鋒輪。



この神仏習合思想は日本の神々と外来の仏教とを調和、融合させた思想で、奈良時代頃から明治時代までの約千年に亘って続いた。各地で神社に仏像を安置したり、神前で読経をしたり、神事に僧侶が携わったりした。太郎坊宮もこの神仏習合が盛んであり、山麓の成願寺が太郎坊宮を管理するなど、深い繋がりを有していた。

仏教の影響は太郎坊宮の御神紋しんもんとして定められている輪宝紋りんぼうもんからも伺うことができる。輪宝紋とは、古代インドの武器である輪宝を模した文様である。仏の説法が心の煩悩を破ることの例えから、仏教の象徴とされるようになった。輪宝が紋様として広まったのは平安時代頃といわれ、太郎坊宮の御神紋の他にも多くの種類がある。

太郎坊宮は、これら神仏習合思想に加えて修験しゅげん信仰しんこうをも

山伏

山に伏して修行する者の意味。山伏の装束や持ち物には法理に基づいた決まりがあり、下の写真にあるように、鈴懸すずかけと呼ばれる衣や結袈裟ゆいげさを身につけ、頭には頭巾しんきんと呼ばれる多角形の冠を被る。その他にも引敷ひっしきと呼ばれる革製の敷物を腰に付けたり、貝の緒いしという綱をつけたりする。また、足は草履わらじきである。

手にする法螺貝ほらがいは獅子の咆哮に似た音色が響くことから仏の説法にも例えられ、悪魔を降伏させるという。

交えたために、他の神社では見られないような、独特の信仰を形作ることとなった。

修験信仰は、原初の山岳信仰を基とし、仏教や道教、陰陽道おんみょうどうなどの諸宗教の影響を受けて成立した民俗宗教である。修験の名は、山中での修行を通じて験力げんりきを得ることに由来する。古くは山臥さんぶがといい、一般的には山伏やまぶしと称された他、山の聖やまひじりや験げん者じゃ、行者じょうじゃといった呼称もある。

いずれも山に籠って修行し、神通力を得た者を指す語である。



役行者

奈良時代頃の山岳修行者で、修験

えんのおづぬ

道の祖と仰がれる。役小角とも。

鬼神を配下にした等、多くの伝説が残る。太郎坊宮の境内にも役行者の尊像が祀られている。



太郎坊天狗面扁額

木製の天狗面。太郎坊宮を守る太

郎坊天狗を象った面。大正六年の銘がある。

えんのきょうじや

修験道の起源は役行者によるといわれるが、古くから日本人には山岳を神聖地あるいは別世界とする観念があり、その中で修行を志す修行者が増加、平安時代の山岳仏教の隆盛によって次第に体系化したとされる。平安時代末期には各地の霊山が修行者の道場となったが、この赤神山でも修行を積む山伏が多く現れた。

山中で厳しい修行を積む山伏の姿は、いつしか伝説の「太郎坊天狗」と重ね合わされ、現在に語り継がれている。

大いなる御神徳を授かる霊

場として栄えた太郎坊宮だが、戦国時代に至って大きな転換期が訪れる。織田信長による近江侵攻である。



織田信長（二五三四）

一五八二

戦国時代の武将。武勇に優れ、諸勢力を下して天下統一に迫った。社寺であっても敵対する勢力には容赦なく攻撃を加え、延暦寺焼き討ちや本願寺包圍戦等を行った。

六角氏

佐々木氏の嫡流。室町時代には足利將軍家に抗うなど、強い力を有した。

臣籍降下

皇族の身分を離れ、臣下となること。

永祿十一年（一五六八）、足利將軍家嫡流の足利義昭を奉

じた織田信長は上洛を意図して軍を動かした。これに対し、

近江南部を領有した佐々木氏（六角氏）は抵抗の動きを見

せ、戦となった。佐々木氏の厚い庇護を受けて栄えてきた

太郎坊宮と麓の寺院も、当然ながら戦禍に巻き込まれることになった。

中世来、太郎坊宮の鎮座する地域一帯を支配したのは、

佐々木氏という一族である。この一族は宇多天皇の孫が承

平六年（九三六）に源朝臣の姓を賜って臣籍降下し、その

孫・成頼が近江国に下向、更にその孫の経方の代になって

佐々木荘の下司として佐々木氏を名乗り、太郎坊宮の麓の

小脇館に拠ったことが始まりという。佐々木一族が拠点と

した小脇館跡は、現在でも太郎坊宮の氏子地域に該当する。

吾妻鏡

鎌倉幕府の事跡を記したもので、十三世紀〜十四世紀頃の成立。

小脇館

佐々木氏が代々本拠とした館で、写真中央の小脇集落付近にあったと類推される。現在でも居館を連想させる「蓬萊門」「岡門」といった地名が残る。建久元年（一一九〇）には源頼朝が滞在し、嘉禎四年（一二三八）には四代将軍の頼経が滞在したという。右方突端の山は太郎坊宮が建つ赤神山。左方には小脇山城があった。

この小脇館に関する調査

では、方二町（約二二〇メートル）を超える規模の館があったと考えられている。

同時代の鎌倉武士達の館と比較すると大規模の部類だ

という。『吾妻鏡』に、この

小脇館に宿泊した将軍一行が大層ご満悦だったとの一文も記されている。小脇館に拠った佐々木氏は小脇郷の開発に意欲的に取り組み、今なお当地を流れる筏川の



織田信長の近江侵攻

足利將軍家の嫡流を奉じ、大義名分を得た織田信長は近江に侵攻を開始する。佐々木氏当主家のろっかくよしかた六角義賢と義治親子はこれを迎よしはるえ撃つが、家臣の離反が相次ぎ、程無くして敗退する。この時、太郎坊宮を含む寺院も兵火を蒙り、多くの被害を出したという。

開削あるいは拡張に努めて農業を奨励し、力を蓄えたと言われている。

また、当時の武士は日常生活を営む館の背後に、いざという時に城となる山を背負うのが一般的であった。佐々木氏が住拠点とした小脇館の背後には太郎坊宮が鎮まる山系が続いており、山中には城址が残されている。織田信長の近江侵攻当時、佐々木氏の拠点は既に近隣のかんのんじじょう観音寺城に移っており、尚且つ周辺で大きな戦らしい戦はなかったが、それでも兵火は大きな被害を及ぼした。五十余りといわれた社殿僧坊はほとんど破壊され、伝来の古文書や宝物も全て灰燼に帰したといわれる。

その後、麓の成願寺は江戸時代初期の寛永十七年（一六四〇）に入り、ようやく本堂や鐘楼を再建している。この

入相

一定地域の住民が特定の権利をもって決められた範囲の森林に入り、木材や薪等を採集すること。

赤神山を巡る僧侶と村人の争いは一向に決着が付かず、大いに紛糾した。最終的に訴訟で敗れた寺の僧侶は、宝物類を始めとする文物一切を持ち去ったという。

復興は各地の信徒による手助けでなされたという。

しかし、今度は赤神山一

いりあい

帯への入相いりあいについて、寺と村人との間で争いが起きる。延宝年間（一六七三〜一六八一）に始まった訴訟は以降七〇余年に及び、最終的に村人の勝訴となって幕を閉じる。

この訴訟の後、太郎坊官の護持も社僧の手を一部離れ、氏子各村が神主を年替



神主

神社に仕える人のこと。神職。

近江温故録

江戸時代中頃に成立した地誌。現在の滋賀県に関する事柄が詳細に記される。

杉谷善住坊（?）一五七三

鉄炮の名手として知られる僧侶。織田信長に敵対して敗れた六角氏の依頼により、信長の狙撃を試みたといわれる。

りで出して務めたことが記録されている。この当番神主の制度は明治時代に至るまで続き、日々の神事や祭礼を執り行った。

江戸時代中頃に成立した『おうみおんこらく近江温故録』は、太郎坊宮について「古来より祈祷の神おろしに唱るに近江の国には禅鬼一党光林坊と申は此寺也と云 南の峯に大岩両方に峙ちそばだてがが峨々たり これ天狗の居る処にて人倫の通路なし」とし、麓の寺院と一体で記している。ここにいう「大岩」が、現在の夫婦岩であり、天狗のいるところと記されているのが興味深い。更には「杉谷善住坊三木大学兩人を大将にて鉄炮てつぽう鍛練の者五十人撰勝り彼魔所の大岩の時つ二つの間を城の如くして忍て籠る由也」との記載もある。杉谷善住坊とは、織田信長を狙撃したことで知られる僧侶である。

近江国輿地志略

江戸時代中頃に成立した地誌。近江温故録を踏まえた記述がみられる。

アーク

胎蔵界の大日如来を表すとされる梵字。**𑖀**の字形を用いる。

バン

金剛界の大日如来を表すとされる梵字。**𑖁**の字形を用いる。

また享保十九年（一七三四）成立の『おうみのくによちしりやく近江国輿地志略』は「こんごうたいぞう峰は金剛胎蔵の曼荼羅。中央は不動明王の垂迹。悪魔降伏の太郎坊。此処に十丈許ばかりの妙岩二行に立。是則アーク、バンの二字を表す」と記している。これは赤神山を指して諸尊の悟りの世界を象徴するものとして、夫婦岩を胎蔵たいぞう界かいと金剛界こんごうかいになぞらえたりしたもので、仏教や密教の影響が垣間見える。



太郎坊権現立像

江戸時代時代中頃以前に制作されたと思われる像。修験者を模した姿で、火焰を象った光背こうはいがある。右手には剣を持ち、左手には索さくと呼ばれる大縄を持つ。彩色が施された上に金泥文様が描かれている。厨子入。成願寺本堂に安置されている。

更には、現在、成願寺が所蔵する「木造太郎坊権現立像」も、当時の太郎坊信仰を知るうえで欠く事ができない。これは行者姿の木像で双翼を背にし、岩座上に立つ姿のもので、江戸中期以前のものときれる。赤神山を巡る争いに敗れた寺僧が、持ち出したものである。



明治維新

江戸幕府が倒れ、近代日本を創始することになった社会的変化。

神仏判然の令

明治元年（一八六八）、明治政府が布告した政策。神道と仏教を分離させることを意図したもので、神社内にあった仏堂や鐘樓が破壊され、神社に携わる僧侶には還俗して僧侶を辞めることを迫った。

神号

神の称号。神仏分離によって権現や菩薩といった神号は禁止された。

近代・太郎坊宮のいま

明治元年（一八六八）、明治維新が成ると、この太郎坊宮にも影響が及ぶこととなった。

その中で最たるものが『しんぶつはんぜんれい神仏判然令』である。奈良時代に端を発するといわれる神仏習合は、神と仏を同一視する思想で、日本人の中に深く浸透したものであった。神社内に寺を設ける、神前で読経を行う、神々に仏教的な神号を奉るといったものが例示される。世に「神仏分離」と言われる一連の指示は、神社に仏教風の名称を使用することを禁じ、仏教的な神号を廃し、神社内の仏像、経典などの廃棄を求めた。

これらは江戸時代に「太郎坊宮」「太郎坊権現」として栄

修験道廃止令

明治五年（一八七二）、政府は修験道を禁止した。これにより、修験道にまつわる法具や経典の多くが破却された。

関所

交通の要所に設置され、通行人や物品を監視し、税を集めた所。

えた太郎坊宮にも及ぶところとなり、神社名の変更がなされた。『近江蒲生郡志』には、明治九年（一八七六）をもって阿賀神社に改称したと記されている。更に、村人の交代で勤められていた当番神主の制を改め、専従の神主である社掌を置くようになった。また、明治初年には『修験道廃止令』が出され、国によって修験行法が禁じられた。

明治維新は、人々の生活にも大きな変化を及ぼした。衣食住は当然ながら、各地に設けられていた関所がなくなつて移動制限から解放され、交通の便が次第に発達した。交通の発達によって旅行も容易となり、各地の社寺仏閣への参拝旅行が全国規模で増加した。こうした旅行者に向けた広告或いは土産物として、各地で版画や図画が多数刊行される。太郎坊宮でも、境内を描いた版画が出版されている。

近江國赤神山阿賀神社全圖



明治三十三年六月廿五日印刷 今年七月 日發行

滋賀縣蒲生郡中野村大字中野第三十八番屋敷

畫作印刷兼發行者 大石 季吉

湖東
琴玉寫



ごほんしゃ
御本社

主たる神社をいい、この場合は太郎坊宮の本殿を指す。

女夫岩

夫婦岩のこと。

じゅうじしや
十二社

太郎坊宮の境内に建つ十二社神社のこと。

イナリ

太郎坊宮の境内に建つ赤神山稲荷神社のこと。

ハイデン

拝殿のこと。

明治三十三年に発行されたこの版面には、当時の太郎坊宮の境内が細かく描かれている。山上辺りに記された「御本社」を始め、「女夫岩」「十二社」「イナリ」「ハイデン」といった社殿等が見受けられる。当然ながら現在の境内と比べると幾つか異同があり、この版面の制作より後に建築される永安殿えいあんてん（旧社務所）、長楽殿ちやうらくてん（講堂）、参集殿さんしゅうてんといった建物群は見られない。永安殿を始めとする建物群は明治時代末期から昭和時代にかけて建造されたもので、増加する参拝者に対応するため、各方面の奉賛を得て建てられた社殿である。

一方で、版面に記されるが現存しない社殿もある。図版中央上に描かれる「コモリド」などはその一例で、かつては信者が籠って祈願した社殿があったという。大祭前夜に

阿賀社道

阿賀神社（太郎坊宮）へ参拝するための道のこと。

御代参街道

仙洞御所（上皇の御所）の代理で、伊勢神宮と多賀大社に参拝する使者が通った街道。東海道土山宿と中山道愛知川宿を繋いだ道。商人が通る市の道としても賑わった。

道標

下写真は昭和五年に建立されたもの。「八日市飛行場 太郎坊 多賀」といった銘が刻まれている。

は多くの崇敬者が集ったため、かなり狭小であったという。なお、参道の石階段は従来切り出しのものであったが、明治時代中期以降に順次敷き直された。

当時、太郎坊宮へ参詣する人々が使用した街道に「阿賀社道」があつた。この道は御代参街道から分岐したもので、明治中頃に鉄道が敷設されるまでは参拝者で大いに賑わった。今では土地改良事業等によって阿賀社道の道筋を辿ることは困難となったが、道案内のために設けられた道標が幾つか現存している。これらの道標は石造で、銘文には「阿賀社道」や「太郎坊道」と記されており、往時を偲ぶことができる。



敬神講社

太郎坊宮を敬う人々で結成された団体。太郎坊宮崇敬者の団体としては最大規模のもので、滋賀県内外に支部が組織されている。

赤明講

敬神講社の母体の一つ。蒲生郡の武久隆佑氏が中心となって設立された。起業者として活躍する一方、全国に太郎坊宮のご神徳を広め、崇敬者を増やした。大正十二年に建立された顕彰碑が山麓に残る。

また、太郎坊宮を信

仰する方々で結成さ

たろうぼうぐうけいしんこう

れた太郎坊宮敬神講

しゃ

社の原型も、明治時代

にできたという。この

せきめいこう

頃「赤明講」と称する

崇敬者の団体があり、

この赤明講の人々に

よって太郎坊宮の神

様の御神徳が宣揚さ

れ、更に多くの崇敬者

が集った。

さて、阿賀社道とと



(前驛坊郎太) 居鳥大の一 社神賀阿 坊郎大江近

鉄道

太郎坊駅を運営したのは私営のこなんてつどう湖南鉄道であった。湖南鉄道は太正二年（一九一三）十二月二十九日に開業した私営鉄道で、太郎坊駅も同時に設置された。湖南鉄道は合併分離によって名前を変え、八日市鉄道、後に近江鉄道となった。戦時中は軍需物資の輸送なども担った。

近江八幡駅

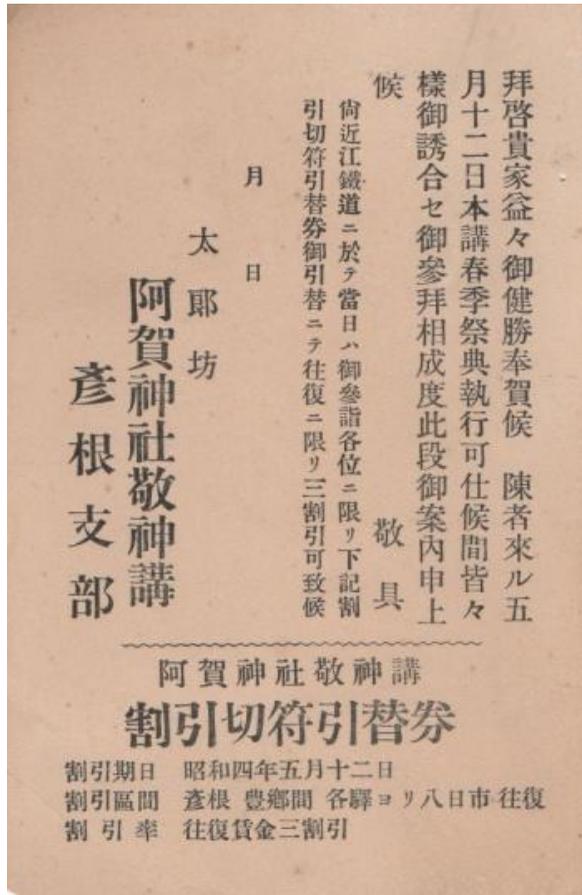
滋賀県近江八幡市にある駅。現在はジェイアール近江八幡駅と同一地点にあるが、かつては場所が異なっていた。また、駅名も新八幡駅といった。

もに参拝者が用いたものに、鉄道がある。日本では明治五年（一八七二）に鉄道が開業して以降、各地に敷設されていった。明治三十一年（一八九八）には太郎坊宮の最寄り駅となる「太郎坊駅」が設置され、参拝者の利便も向上した。年末年始や太郎坊宮の祭礼日には臨時列車の運行もあったという。中には一月一日午前一時に太郎坊駅発、一時二十分に近江八幡駅着という深夜便も存在した。

また、太郎坊宮を参拝する崇敬者に限って使用が許された乗車割引券もあったという。次の写真は、敬神講社の会員に配布された割引券の一例である。これは現在の滋賀県彦根市内に設けられた彦根支部が発行したもので、五月十二日に敬神講の春の祭典を行うこと、本券と引き換えで割引運賃となること等が記されている。

割引切符引換券

昭和四年、敬神講彦根支部が発行した。官製はがきの規格で、彦根支部の会員向けに配布された。



太郎坊駅が設置されてから年月が経つと、今度は増加し続ける参拝者に対して既存の駅舎では対応しきれないという問題が生じた。そのため、大正十五年（一九二六）に太

沿線御案内

発行者は八日市鉄道。表紙には赤神山の山肌に建つ太郎坊宮と、飛行機数機が描かれている。

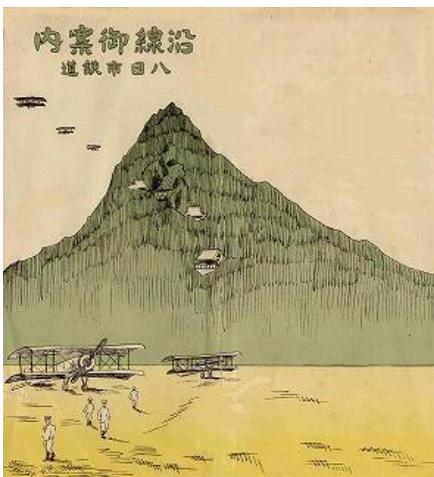
誌面には太郎坊宮が特に念入りに描き込まれており、沿線の重要な観光地であったことが伺える。

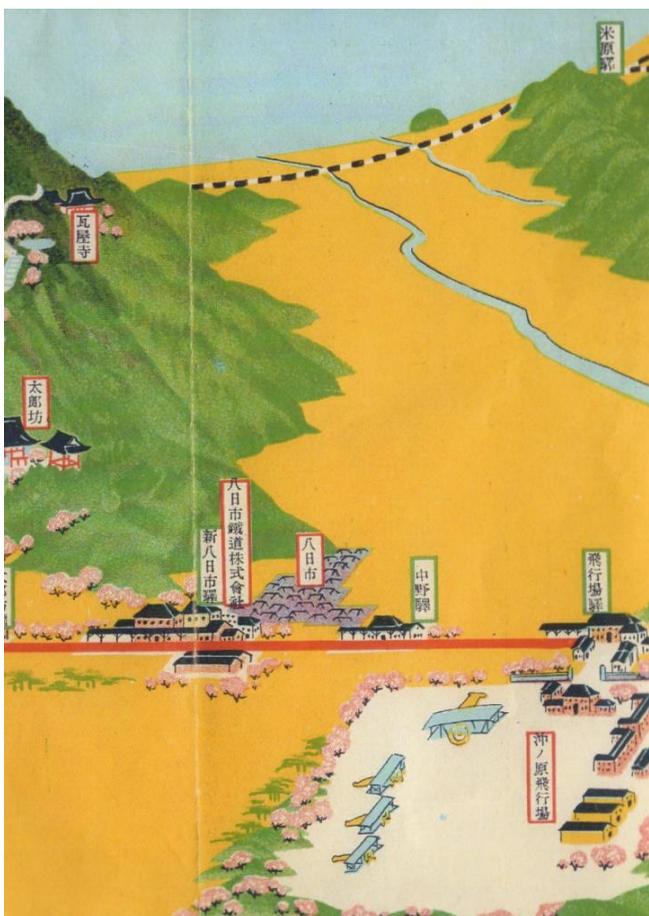
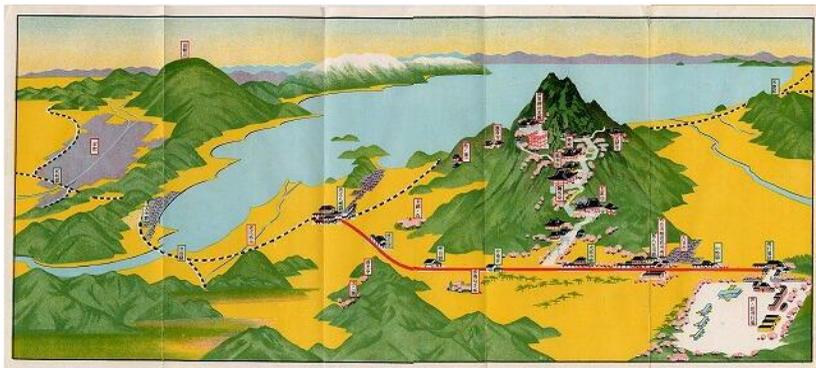
駅舎名称等から、昭和五年（一九三〇）頃に作図されたと思われる。

郎坊駅を運営する鉄道会社に対し、太郎坊宮の役員連名で駅舎改築の依頼を行っている。改築工事は翌年一月にはほぼ完成となり、駅員も配置された。

大正時代は太郎坊宮の敬神講社が正式に神社付属の団体として設立された時代でもある。また、大正十三年（一九二四）には本殿の増改築も実施され、境内の施設も更に充足した時代である。

さて、ここに『沿線御案内 八日市鉄道』と題された冊子がある。表紙の絵には、数多の飛行機と共に赤神山が描かれている。





この絵図には、境内施設も丹念に書き込まれている。

山上に「阿賀神社本殿」とあるほか「楽殿がくでん（神楽殿）」、「社務所（旧社務所。永安殿）」、「絵馬堂（絵馬殿）」の名が見られる。その他にも本殿前の舞台や、境内の諸社も描かれている。太郎坊宮山麓の寺院は「太郎坊」として記されている。

周辺の名所も記されており、「瓦屋寺」、「観音寺（観音正寺）」、沖ノ原飛行場」等の名がある。



八日市飛行場

現在の滋賀県東近江にあった飛行場。日本初の民間飛行場として出発したが、紆余曲折を経て陸軍の航空隊を誘致。往時は日本一の広さを誇るといわれたほど、広大な飛行場となった。航空部隊と陸軍飛行場の存在は近隣住民の誇りであったという。昭和十八年（一九四三）には拡張工事が行われた。

敗戦後、飛行場は廃止されて住宅地や農地、工業用地になった。

当時、太郎坊宮の近くには八日市飛行場があった。民間

飛行場から出発した八日市飛行場は後に陸軍飛行場となり、大正十一年（一九二二）に陸軍航空第三大隊の開隊式を迎えている。

この八日市鉄道沿線の観光名所と言えば太郎坊宮と八日市飛行場であったとい、冊子には大正時代末期から昭和時代初期の太郎坊宮の様子が描かれている。

陸軍飛行場があった頃は



△ 観望所 飛行場跡 滋賀県 山崎郡 八日市

大凧

東近江市の伝統行事。江戸時代に始まったと言われ、百畳の大きな凧を揚げるもの。

供出令

戦中の物資不足を受け、鉄を確保するために出された指令。多くの社寺は秘蔵の刀剣や梵鐘を供出した。太郎坊宮山麓の寺院も梵鐘を供出している。

占領政策

日本を占領した連合国司令部による政策。伝統文化の排斥等が行われ、団体で神社へ参拝することも禁じられた。

毎年四月三日に飛行場まつりというものがあり、その日は飛行場が解放された。航空隊員による仮装行列が出たり、おわたし伝統行事の大凧揚げがあったりして大いに賑わった。八日市飛行場での軍務に従事する人々は多く、太郎坊宮はそうした人々にとつての憩いの場でもあったという。

そして未曾有の国難となった戦争の影響は各方面に及んだ。太郎坊宮では宝刀宝剣の供出があり、僅かに残されたものも戦後の占領政策で破壊された。また戦争最末期には太郎坊駅の駅舎業務も休止されることになり、戦後の昭和二十四年（一九四九）に入って再開された。なお、駅舎はその後も修理改築などを経て、平成十年（一九九八）に駅名が「太郎坊宮前駅」へと改称されている。

戦後は人心の荒廃も叫ばれたが、氏子崇敬者は太郎坊信

太郎坊産業道路

参拝者の利便を考慮し、自動車道を建設することを意図して計画された道路。当時の市報には「自衛隊のブルドーザー二台をはじめコンプレッサーなど多くの大型機械が威力を發揮」「観光道路としても重要な意義をもち、当市の観光面に大きく貢献する」と記されており、工事規模の大きさと工事に寄せる期待の程が伺える。

山上大鳥居

平成十九年（二〇〇七）に建立された石造の大鳥居。氏子の山形實氏の奉納。

仰道の護持に努め、敬神講社組織の拡充、祭礼行事の体系化を遂げた。

昭和三十七年（一九六二）には自衛隊によって太郎坊産業道路が起工された。この道路の竣工により従来は石階段に限られていた参拝が自動車でも可能となり、境内中程まで登れるようになった。その後も参集殿の造営や山上大鳥居の建立等、境内各施設の充実が計られている。

